

2) 糖尿病患者の Lp(a) と腹部大動脈石灰化

上田 春男 (信楽園病院検査科)
 吉田 秀義 (同 放射線科)
 高沢 哲也・山田 幸男 (同 内科)

糖尿病患者の Lipoprotein (a) (Lp(a)) について検討すると共に、腹部大動脈の CT 画像から得られた血管の石灰化との関係を検討した。

当院の糖尿病患者、男性 355 名・女性 311 名の La(a) 濃度分布では、2 割の人達が高値を示し、高齢者では若い人に比べやや高い傾向を認めた。しかし男女差はないように思われた。

腹部大動脈の臍の高さ、5 cm 上、10 cm 上、15 cm 上の 4 カ所の部位で、血管の石灰化率を12分割法で計測した。その結果、男性のほうが女性に比べどの部位でも高い石灰化が見られた。また臍の高さで石灰化率が高く、上へ行くに従って次第に男女とも石灰化が少なくなる。それに、それぞれの部位の血管の石灰化の認められる方向は差が認められた。

Lp(a) 濃度が高くなるにつれ、腹部大動脈の石灰化が多く見られ、Lp(a) と腹部大動脈の石灰化に関係が認められた。

3) Cokayne 症候群の 1 例

奥泉 薫・高澤 希子
 谷 長行・伊藤 正毅
 柴田 昭 (新潟大学第一内科)

患者：37歳女性。幼児期より低身長で初潮は11歳。学童期に光線過敏症(+)。18歳時に難聴、32歳時歩行時のふらつきが出現し'92年1月6日検査入院。身長 122.2 cm, 体重 26.9 kg, 四肢均整。眼球陥凹, 上顎突出, 老人様顔貌(+)。染色体検査異常なし。下垂体・甲状腺・副甲状腺機能, 血中尿中アミノ酸分析, 白血球ライソゾーム酵素, 尿中ピルビン酸濃度は正常範囲。頭部 MRI でびまん性小脳萎縮, 基底核石灰化(+)。網膜変性症と感音性難聴を認めた。

考案：上記所見より Cokayne 症候群と診断した。本症候群は DNA 修復機構の異常による早老性疾患の 1 つで、通常30歳前後で死亡することが多く、本症例のように比較的進行が緩徐で高齢で診断された例は稀と考え報告した。

4) 緩徐な経過をとったいわゆる急性甲状腺炎の 1 例

田口 哲夫・中野 徳 (新潟県立新発田
 病院小児科)
 田中 茂穂 (田中 医院)

症例は10才の女兒。1992年1月3日頃から頸部痛、1月11日から右前頸部の腫瘤に気づかれた。症状が軽く、赤沈は中等度の亢進を呈したが、CRP・白血球数はほぼ正常。非典型的亜急性甲状腺炎としてアスピリン投与にて経過を追った。発症8週目に食道造影を施行。右側 Periform sinus fistula を発見、急性甲状腺炎と診断し抗生物質を開始。しかし、腫瘤に波動を触れるようになり、皮膚発赤も著明となったため3月18日穿刺排膿し治癒した。本症には緩徐な経過をとる症例があり、かかる場合には、食道造影が診断に有用と思われた。

5) 遺伝子組み換え TPO を用いた抗 TPO 抗体の測定

吉岡 光明・斉藤 秀晃 (新潟県立中央病院
 内科)
 小谷 富男 (宮崎医科大学中検)
 八木橋 悟・加藤 英夫 (日本製薬検査薬
 研究所)

甲状腺ペルオキシダーゼ (TPO) は、甲状腺自己免疫疾患者に高頻度に出現する抗マイグロゾーム自己抗体の主要な対応抗原であることが近年明らかになった。今回、遺伝子組み換え hTPO を抗原に用いた ELISA 法にて甲状腺疾患患者の抗 TPO 抗体を測定した。結果 1) 従来の凝集法による抗マイグロゾーム抗体と抗 TPO 抗体との相関については、症例により解離するものも見られたが概ね良い相関が認められた。2) 解離する要因の一つに、従来法の抗マイグロゾーム抗体の測定系では、抗サイログロブリン抗体との交叉が影響していると考えられた。3) 甲状腺機能亢進症患者の中には、抗甲状腺剤の投与により抗 TPO 抗体の変動する症例もみられた。今後、抗 TPO 抗体の測定は甲状腺疾患の病態を把握する上に重要な指標になると期待される。